

Shingashiめぐり・わくわくフェスティバル（埼玉県川越市） Shingashiめぐり・わくわく
Shingashiめぐり・わくわく

フェスティバル実行委員会

フェスティバル実行委員会

フェスティバル実行委員会

久高 健



1. 川越市の概要

川越市は、埼玉県で初めて市制を施行した人口約 35 万人の中核都市です。川越は「小江戸」と呼ばれていますが、実はこの小江戸の由来は新河岸が大きく関わっています。新河岸は江戸時代から約 300 年間にわたり、川越と江戸とを結ぶ舟運による重要な輸送路として栄え、積み荷の積み下ろしを行う船頭や行き来する人たちが大いににぎわいを見せた新河岸川舟運の地です。江戸から運ばれてきたものは日用品だけでなく、様々な文化がいち早く伝わったことから、ここ新河岸は「小江戸川越」の産業を支えてきた重要な地で、現在も河岸場跡や舟問屋の舟運遺構が残されている歴史あるまちです。



昭和初期の新河岸川舟運

2. 本事業の取組みに至った経緯

新河岸のまちづくりへの機運が高まったきっかけは、2017 年、東武東上線新河岸駅のリニューアルや、駅前広場、駅前通りが整備されたことです。



リニューアルした新河岸駅西口

地域住民から「せっかく駅周辺が整備されたのに、まちの元気につながっていない」との声が上がりました。住民のまちの活性化への思いと、ハード整備で終わるのではなく、いかに整備された駅周辺をまちづくりに活用していくか、ソフト事業との相乗効果を模索していた行政とも思いが合致。ワークショップで議論を重ね、2021 年、新河岸駅中央商店会や自治会、学校及び企業等が主体となり、ここで暮らす人、訪れる人、全ての人がわくわくするような取組を行い、活気あふれるまちを目指すべく、「Shingashi めぐり・わくわくフェスティバル実行委員会」を設立しました。



店主主、自治会長、行政等が参加したワークショップ

3. 事業実施内容

実行委員会では、地域住民主体によるまちづくりを目指して、3 本の柱を軸に地域活性化事業を実施しています。令和 5 年度の実施内容は次のとおりです。

①Shingashi めぐり・わくわくフェスティバル（通称：わくフェス）2023 の開催



地元小学生参加のコンテストで決定したシンボルマーク

イベントを通して、新河岸の魅力を市内外へ発信するとともに、参加した皆さんにわくわくする空間と時間を演出することを目的としています。2021 年に始まったわくフェスのシンボルマークは、地元小学生による作品を採用したもので、第 1 回のわくフェス開会式で表彰式を行いました。わくフェスは、回を重ねるごとに成長し、基盤整備によって生まれ変わった幅員 16 メートルの駅前通りを歩行者天国にして、こどもたちによるダンスパフォーマンスやよさこいパレード、居囃子（いばやし）の披露のほか、路上プロレスや地元出身のジャズピアニストによる野外ライブ等を行いました。



整備された幅員 16m の駅前通りで地元中学生によるよさこいパレード

小学校の校庭では、28 店舗が出店した屋台村や企業等が参画した体験コーナーを設け、ステージでは地元の県立川越初雁高校吹奏楽部による演奏やサンバカーニバルを会場の皆さんと一緒に踊り、大いに盛り上がりました。また、未来の新河岸を描いた絵画コンテスト「みらいのしんがしってどんなまち？」受賞者の表彰式を行い、こどもたちが地域への関心を深めるきっかけづくりを進めてきました。さらに、こどもたちに大人気の「花植え体験イベント」や県立川越工業高校機械科による「ミニ電車乗車体験」、そして地域資源を

活用した、新河岸川乗船体験や史跡めぐりガイドツアーを実施しました。

令和5年度は4会場で延べ約2万人が来場し、新河岸地域最大の活性化イベントに成長しました。実行委員会や地域にとって、イベントの成功体験が更なる地域への愛着と次なる活動の原動力につながっています。



こどもたちに大人気の花植え体験イベント



高校生が運営するミニ電車乗車体験

②民間まちづくり人材育成事業

実行委員会では、まちづくりの担い手の発掘と育成を目的に、ワークショップと視察研修会を毎年実施しています。

ワークショップは、自分のまちについて考え、まちづくりへの関心を高めるきっかけとなっています。令和5年度は、観光地として人気がある、蔵造りの町並みを支える川越一番街商業協同組合から講師を迎え、更なる地域活性化の実現に向けての助言やインバウンド対応への苦慮等について実体験を交えた講演会を行いました。

視察研修会では、市外のイベントを視察し、そこで得たノウハウをイベント運営の参考にしました。



市内外から講師を招いた「まちづくり人材育成のワークショップ」

③世代間交流事業

生産年齢人口が減少する中で、どのように持続可能なまちづくりを実現するか。これからを担う世代に暮らし続けてもらうために、どうしたらこのまちが好きになるのか、ファンが増えるのか、検討を重ね、令和5年度から世代間交流を通じた地域活性化に取り組んでいます。地域のつながりを強め、生産年齢人口の流出抑制を図るべく、地域資源である「舟運」を代表する新河岸川乗船体験により、地域のこどもたちと一緒に歴史に触れたり、駅前広場の花植え体験や定期的な水やりをしたりすることを通じて、世代間交流に取り組んでいます。



舟運遺構を活用した新河岸川乗船体験を楽しむこどもたち

また、ふれあいヨガでは、幅広い世代が参加しやすいイベントで三世代の健康増進のほか、こどもたちとその親世代のまちの活動に参加する意識が向上するきっかけとして、将来のまちづくり人材の育成にも寄与するものと期待しています。



三世代ふれあいヨガ

4. 事業実績

実行委員会の設立当初は、駅周辺という小さなエリアでの活動でしたが、参画の輪は徐々に広がりをみせています。地域の小学校・中学校との連携をきっかけに、地域活性化に積極的に関わりたくて若い人たちが集まり、今までとは違う住民主体に

よる「企画・運営部会」が発足しました。

また、運営資金の面では、当初、地域活性化センターの「地方創生に向けて“がんばる地域”応援事業」の助成金を活用してスタートしましたが、実行委員会のこれまでの取組が評価されたことや、わくフェスの認知度が向上したことで、企業等からも協賛の輪が徐々に広がり、行政に頼らない、住民主体によるまちづくりの実現の兆しがみえてきました。

5. 今後の展望

今後も実行委員会の継続的な運営と、わくフェスの開催、民間まちづくり人材育成と世代間交流に取り組むことが重要であり、特に、いかにして次世代のまちづくりの担い手であるこどもたちに参加してもらうか、そして、自分のまちに興味を持ってもらえるかがポイントであると考えています。



まちづくりの担い手育成を目的に中学生以上のボランティアを募集

こどもたちがわくフェスに遊びに来て楽しい時間を過ごし、中学生・高校生になってボランティアとしてイベントのお手伝いをする。地域での楽しい体験と、担い手として地域に参加することで地域とのつながりを築き、社会人になったらイベントの企画、運営に携わるというサイクルを目指して、これからも、ここに住むこどもたちとともに、新河岸の活性化に取り組んでいきたいと思えます。